

令和元年5月17日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02311

研究課題名(和文) トールキン作品における「先史」観の未刊草稿原稿による解明

研究課題名(英文) Tolkien's views on 'pre-history' of Britian perceived in his unpublished manuscripts

研究代表者

辺見 葉子 (HEMMI, YOKO)

慶應義塾大学・文学部(日吉)・教授

研究者番号：40245428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：英国オックスフォード大学、ボドリアン図書館所蔵のJ.R.R. Tolkienの未刊の手稿原稿、特に「先史観」(これはTolkienの場合とりもなおさず「先史言語観」となる)の理解に力ギとなる'English and Welsh'の草稿調査を行った。
この'English and Welsh'のextended edition出版のプロポーザルが正式にthe Tolkien Estateに認められ、英国HarperCollins社からの出版契約を結ぶことが出来た。ここには'English and Welsh'以外のTolkienの「先史言語観」に関連する草稿調査の結果も含める予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Tolkienの学術論文・レクチャーのextended editionはこれまでに二つが出版されているが、今回の'English and Welsh'のextended editionは、それに続くシリーズ第三弾に位置づけられ、Tolkien研究の新動向となった草稿調査に基づく未刊原稿の出版の一翼を担うこととなる。

また、研究成果を英語で英国大手出版社HarperCollins(Tolkien関連の作品をオフィシャルに扱う)から出版することにより、研究者そして一般読者も視野に入れた研究結果発表であり、日本のみならず世界の研究者、Tolkienの読者に対して成果の還元が可能となる。

研究成果の概要(英文)：This project attempted to determine Tolkien's views on pre-history of Britian, which, in Tolkien's case are equated with those on pre-history of languages in Britain. Tolkien's unpublished manuscripts of 'English and Welsh' was thoroughly studied along with related academic papers. The proposal to publish the result of this project, combined with the previous ones, as an extended edition of 'English and Welsh', a third book in a series of extended editions of Tolkien's academic papers, was officially granted a permission by the Tolkien Estate and will be published by HarperCollins.

研究分野：英文学

キーワード：トールキン ブリテン島におけるケルト語

1. 研究開始当初の背景

研究開始の 2015 年当初は、それに先立つオックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵の J.R.R. トールキンの 'English and Welsh' (1955) の未刊草稿原稿調査 (2012~2014 年度、科研費, 24520306) がようやく軌道に乗り、極めて不完全ながらも、草稿原稿全体のトランスクリプト準備の第一段階が終了したという状況であった。

調査の過程で、新たな課題が数多く浮上した。中でも、トールキンがオックスフォード大学で行った古英語、英語史の講義ノートの他、ブリテン島の先史と直接関わる Lydney の遺跡に残る Lydney の地名に関する論考は、これまで研究もなされていないため貴重な資料であるが、トールキンのこれら一連の研究・教育活動の集大成が 'English and Welsh' であると位置づけられる。よってこれら未刊草稿原稿の調査は、'English and Welsh' 研究の一環として不可欠なものであることが明白となり、本研究助成を申請した。

2. 研究の目的

- (1) トールキンの『指輪物語』の中つ国における言語世界は、彼のブリテン島における言語層の認識を反映したものである。ブリテン島における基層言語としてのケルト語 (British-Welsh) とその更に深層に位置するインド=ヨーロッパ語との関係に関するトールキンの見解を、作品における「先史言語」観に照らしながら検証する。
- (2) 'English and Welsh' のレクチャーは 1955 年に行われたが、それに先立つトールキンのオックスフォードにおける英語史、古英語詩 Exodus などに関する講義ノート (ボドリアン図書館収蔵) の調査とトランスクリプションを作成する。
- (3) 'The Name Nodens' (1932 年に *Report on the Excavation of the Prehistoric, Roman, and Post-Roman Site in Lydney Park, Gloucestershire* の appendix として出版された) の草稿で Lydney papers (ボドリアン図書館収蔵) の調査とトランスクリプションの作成を行う。
- (4) 上記の調査を含んだ 'English and Welsh' の extended edition の出版を目指しているため、第一に the Tolkien Estate に出版プロポーザルを提出し、許可を得る。その上で出版社との交渉に入り、出版準備を進める。

3. 研究の方法

- (1) 『指輪物語』の言語世界理解の最も重要なカギとなる 'English and Welsh' のエッセイの未刊草稿 (ボドリアン図書館所蔵) には、出版稿には含まれなかった、トールキンのブリテン島における先史言語観と関連するメモが存在するため、'English and Welsh' の草稿マニュスクリプトの詳細な調査・トランスクリプトに基づき、同時代の学問動向も含めて考察を加える。研究開始時点におけるトランスクリプトは、判読できない箇所が多数あり、精度が低いものであったため、この照査の作業をトールキン研究者で、Tolkien and the Great War の著者として名高い John Garth に依頼した。
- (2) 未刊の草稿で言及されている事項について、注釈作成の準備として調査をする。
- (3) 'English and Welsh' は O'Donnell Lecture Series の第一弾であったが、このレクチャーのレクチャー・シリーズの開催・運営に関わる委員会の議事録、講演者との交渉書簡や支払い記録などの資料が、オックスフォード大学アーカイブにファイルされ残っている。トールキンは自身も委員会の英文科を代表する委員であり、第一回の講演者でもあったわけだが、このファイルの調査により、委員任命から講演スクリプト提出と支払い完了に至る、トールキンの O'Donnell Lecture Series への一連の関与の詳細な過程を明らかにする。
- (4) ボドリアン図書館およびトールキンの所属コレッジであった Merton College 図書館の図書貸出記録の調査を行い、トールキンが 'English and Welsh' の講演準備のために借りだした本を特定する。
- (5) トールキン自身が所有していた蔵書がボドリアン図書館に Tolkien Library として所蔵されている。'English and Welsh' の草稿で言及されている図書について、彼自身の蔵書への書き込みの調査を行う。
- (6) 2018 年 6 月~10 月、ボドリアン図書館においてトールキン展 'Tolkien: Maker of

Middle-earth'が開催され、Carl Hostetter, Verlyn Flieger, John Rateliff, Tom Shippey, Dimitra Fimiらトールキン研究者が参集する機会があった。2018年3月末～2019年3月末までの一年間は、勤務大学より研究休暇を与えられ、一年間オックスフォードに滞在できたため、この機会をとらえ、これらエキスパートたちに疑問点解明の協力を仰ぐ。また、オックスフォード大学の関連分野の教授陣にも同様に協力を仰ぐ。

4. 研究成果

- (1) トールキン財団の厳しい規制により、マニユクリプトは一切写真撮影、コピー、スキャンも許されない中、本科研費助成によりボドリアン図書館での調査期間を確保出来たことにより、トランスクリプションの精度向上が叶った。ボドリアンのトールキンの archivist である Catherine McIlwaine にも手稿原稿解読の疑問点解明の協力を仰いだ他、トールキン研究者でトールキンの特に初期手稿原稿に精通している John Garth の協力を得て、トランスクリプションのダブルチェックを行うことも出来た。
- (2) ボドリアン図書館の蔵書とデジタルデータを有効活用し、'English and Welsh'の expanded edition に付す注釈のための資料収集が出来た。
- (3) オックスフォード大学所属の各分野の研究者たち (Old English に関しては Simon Horobin, Mark Atherton、Middle English に関しては Helen Spencer、ケルト語、ケルト文学に関しては Mark Williams) の協力を得て、手稿原稿における疑問点の解決が大きく前進した。
- (4) 科研費の研究助成により過去数年に亘って続けてきた、米国カラマズーにおける国際中世学会のトールキン・セッションへの参加により、英米のトールキン研究者たちとの交流、情報交換により、研究ネットワークを更に広げることが出来た。またオックスフォードにおいても、特にボドリアン図書館における大規模なトールキン展 (Tolkien: Maker of Middle-earth) の開催期間中にオックスフォードに滞在できたため、各国から訪れたトールキン研究者との交流が深められた。展覧会開催中にはトールキン関係のレクチャーも数多く企画され、様々な角度からのアプローチに触れることが出来た。
- (5) トールキン財団の窓口になっている Cathleen Blackburn とのやりとりの結果、'English and Welsh'の expanded edition の出版に向けての仮の許可が下り、マニユクリプトのカメラ撮影が許可され、そのデジタルイメージをトールキン研究者で言語のエキスパートである Carl Hostetter と Arden Smith とシェアすることも許可され、疑問点について協力を上げた。
- (6) 2018年11月、トールキン財団に 'English and Welsh'の未刊草稿情報、コメントリや註を加えた extended edition 出版の正式なプロポーザルを提出、2019年一月末には正式な許可が得られた。それを受けて、英国においてトールキンのオリジナル作品の出版を一手に担う HarperCollins 社との交渉を行い、3月半ば、出版契約を結ぶに至った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

Yoko Hemmi, 'Fairies and Falsehoods', *Geibun Kenkyu*, vol. 113-2, 2017, pp. 40-55.

Yoko Hemmi, 'Tolkienesque Transformations: Post-Celticism and Possessiveness in "The Lay of Aotrou and Itroun"', in *The Return of the Ring: Proceedings of the Tolkien Society Conference 2012*, vol. 2. (Edinburgh: Luna Press, 2016), pp. 3-14.

[学会発表](計 3 件)

辺見葉子, 「妖精の起源論概説：人種・ケルト」日本ケルト学会東京研究会, 2018.

Yoko Hemmi, 'Tolkien's Concept of "Native Language" and the "English and Welsh" Papers at the

Bodleian Library'. 51st International Congress of Medieval Studies, Western Michigan University, May, 2016.

辺見葉子, 「J.R.R. Tolkien の中つ国におけるマイノリティ - 言語 - Dunlendish」第 35 回日本ケルト学会大会、2015.

〔図書〕(計 2 件)

辺見葉子, 『ケルト文化事典』木村正俊・松村賢一編、東京堂出版、2017, pp. 135-247.

辺見葉子, 『アーサー王物語研究：源流から現代まで』中央大学人文科学研究所編、中央大学出版部、2016, pp.285-323.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。